

本会元理事長 織田武雄先生を偲ぶ



悼の意を捧げる。

先生は、明治四〇年六月二九日、京都市にお生まれになり、京都府立第一中学校から鹿児島第七高等学校を経て、昭和四年四月に京都帝国大学文学部に入學、地理学を専攻、昭和七年三月に卒業された。続いて龍谷大学予科、関西学院高等商業学校、立命館大学文学部の講師を歴任され、同十五年関西学院高等商業学校教授、同二十一年四月立命館大学文学部教授に就任された。しかしわずか一年後の昭和二十二年三月、先生は母校の京都大学文学部の助教に就任されることになる。これは、同地理学教室が、戦時

本会元理事長、京

都大学名誉教授、文学博士、織田武雄先生は、平成十八年十月十八日、屋内での不慮の事故のため逝去された。享年九九歳。ここに謹んで哀

中地政学へ走ったために、戦後全ての教官が辞任せざるを得ない事態となり、東洋史講座の宮崎市定教授の兼任でかろうじて講座が維持されている状態であったためである。以後、先生はお一人で教室の再建と運営に当たられ、昭和二十五年十一月教授に昇任されるが、なお助教を欠く不完全講座の状態が続き、それが解消するのは、昭和三四年、水津一朗助教の赴任を待たねばならなかったのである。この間先生は幾多の俊秀を育て上げると共に、大学運営にも貢献され、昭和三七年～四〇年、四四年～四六年の間、評議員をお勤めになり、持ち前の柔軟な行動力で大学紛争の収拾にも当たられた。昭和四六年三月、先生が京都大学を停年退職されるに際し、上記のような功績に対して、京都大学名誉教授の称号が与えられた。その後先生は、関西大学文学部史学地理学科の教授に就任され、ここでも大学院文学研究科地理学専攻の設置に尽力されると共に、昭和五〇年～五一年には大学院部長を兼任され、昭和五三年三月の停年まで、同地理学教室の発展に貢献された。

学界においても、先生のご功績はまことに大きいものがあつた。戦後まもなく、先生は西日本地理学会の創立を主導され、昭和二十三年三月には、これを母体に人文地理学会を立ち上げられ、初代会長に就任された。以来先生は、断続的に十二年間余り会長職を

歴任され、人文地理学会の基礎を築かれた。混乱した戦後社会にあって、学会を創立し、学術雑誌を継続刊行することがいかに困難であったか、その後先生は、折に触れてその時期の苦勞話を披露されるのであった。爾来人文地理学会は、真の意味での全国学会として成長し、会誌『人文地理』は、わが国を代表する学会誌となるのであるが、その方向を先導された織田先生の功績は、まことに大きいと言わねばなるまい。先生は、昭和四九年～五〇年の間、日本地理学会会長職に、関東地方以外から選ばれた初めての会長として就任されるのであるが、先生の上記のような業績からすれば当然のことであつたと言えよう。先生はまた、本史学研究会についても、昭和三四年から十年余り理事を続けられ、昭和四五年～四七年には理事長としてその発展のために尽力された。『史林』にも五編の論文を投稿しておられる。

先生の初期のご研究は、地理学史や地図史研究のほか、地誌・自然地理・地図表現法・人口地理・農業地理など、多様な関心と志向性を示している。他方、戦時中の地政学の嵐に対しては、先生は一線を画して、これを避けられたと聞いている。戦後、京大着任後は、先生のご研究は、地理学史及び地図史の研究に収斂して行く。主著『古代地理学史の研究——ギリシャ時代』（柳原書店、昭和三四年）は、ギリシャ時代の地理的思考の展開と地理的

探検史を論じたもので、昭和三六年一月、本書に対して文学博士の学位が授与された。さらに先生は、教室に蓄積された内外の古地図・同写本・関連文献、さらには天理図書館など他機関所蔵の諸資料を活用され、日本・東洋及び西洋の地図史研究を精力的に進められた。それらの成果は『地図の歴史』（講談社、昭和四八年）、『古地図の世界』（講談社、昭和五六年）、及び『古地図の博物誌』（古今書院、平成十年）に集成された。前二者は、研究者による高い評価と共に、一般読者にも広く受け入れられた。また最後者は、実に先生九一歳の時の出版であつた。先生はまた、古地図集の編集や監修にも当たられ、『日本古地図大成 日本図編』（講談社、昭和四七年）、『日本古地図大成 世界図編』（講談社、昭和五十年）、『ブトレマイオス地理学』（東海大学出版会、昭和六一年）などを世に問われた。地理学史・地図史研究以外としては、まず、京大の西アジア学術調査の報告書『西南アジアの農業と農村』（昭和四二年、共著）を挙げねばなるまい。先生は本書の中で特にカナート灌漑について注目しておられるが、カナート研究は、先生が終世追及されたもう一つの研究テーマとなった。その他、森 鹿三との共編『歴史地理講座』（全三巻、朝倉書店、昭和三一～三四年）、編著『アフリカ』（新世界地理第九巻、朝倉書店、昭和三七年）、編書『南アジア』（世界地理四、朝倉書店、

昭和五三年)なども、学界に対する大きな貢献であった。

先生は、大正デモクラシーの影響下に育たれたせいとか、お考えは常にリベラルであった。女性に対しては照れ屋ではあったが、親切でフェミニニストであられた。祇園の御茶屋やバーに客人や教え子を伴われることも多かったが、酒席での先生の会話はまことに軽妙洒脱、酒そのものではなく、会話の雰囲気を楽しんでおられた。晩年の先生は、比叡山麓のホームに居を移され、ご病気の

奥様を看とられた。先生は、亡くなられる直前まで、眼は悪くなっておられたが、依然かくしゃくとして、頭脳はとりわけ明晰であられた。先生の生年は地理学教室の創立年と同じで、平成十九年には、教室百周年と共に、先生もめでたく百歳を迎えられるはずであった。先生もそのことを楽しみにしておられたのであるが、かなわぬこととなつてしまった。今はただ、ご冥福をお祈りするのみである。

(石原 潤記)